

あわれらは今日も、 積読を生きている

島田潤一郎 × 大石トロンボ

読もうと思って買ったはずの本が、気づけば手つかずのうちに増殖している——そんな積読に悩み、取り組み、楽しんでいるお二人の対談です。日々の積読ライフや、傾向と対策(?)について語っていただきました。

積読、どうしてますか？

島田 ぼくは『望星』の連載で、ここ何号か積読のことを続けて書いているんですが、そもそも積読と積み本は違うんですかね？

大石 いつか読もうと思っている本を積み行為自体が積読で、積読している本を積読本とか積み本と呼ぶようです。言葉としては積読のほうが有名で、「積」と「読」の間に「ん」が入るか入らないかが問題になることもありますね。漫画好きでX(旧ツイッター)をやっている人は、積み本を使うことが多い気がします。以前はわたしも積み本と言っていましたけど、いまは一般的な言い方に寄せて積読本と言っています。

島田 へえ、いろいろあるんですね。積読を意識し始めたのは、いつごろですか？

大石 興味のある対象が広がって、買う本が増えたけれども読める量が追いつかなくなったタイミングで、ここ十年くらいですね。

島田 ぼくは、ここ二十年くらいは積読のことを考えている気がします。生活がうまくいかないと、その穴

大石 小学六年生ですが、やはり無関心ですね。

島田 積読本はこれで全部ですか？

大石 押し入れが本で埋まっていますが、そこにある積読本は少ないです。積読本は基本的に、見える場所に出すようにしているのです。

島田 本はすべて積んでいる？

大石 文庫用の低い本棚だけはちゃんと買ったんです。そこにはミステリ小説が詰まっています、あとは衣装ケースに入れてある分もありますね。本当に置き場所がなくて。

島田 でも、買うんですか？

大石 買うんですよ。

島田 ぼくもです。それをわれわれは、なんとかしなくてはいけません。読まずに処分するのは、ちょっと……。

大石 わたしも同じで、読まずに売って、まったく無意味な行為じゃないですか。それが新刊だろうが古本だろうが、買ったことには必ず理由があるはずですから。

島田 なぜ買ったのを忘れていることは、ぼくはまだないから、当時の自分を裏切らないためにも読みた

埋めたいにして本を買うじゃないですか(笑)。

大石 ああ、わかります(笑)。

島田 そうやって溜まった本が千冊くらいあって、そのほとんどが活字本です。

大石 わたしは、活字と漫画と同じくらいかな。

島田 何冊くらいあるんですか？

大石 数えたことはありませんが、リビングが積読本の置き場になってしまっているんです。これが写真で、普段は布を被せています(23ページ)。

島田 す、すごい。積読本に囲まれて暮らしているって感じですね。崩れてきて、生活に支障をきたしたりはしないんですか？

大石 そこは、長く培ってきたバランス感覚で積んでいますから、意外と崩れないです。

島田 大石さんのところには、幼稚園に通われているお子さんがいらっしやいますよね。触って崩したりはしないんですか？

大石 絵本など、本人に興味のありそうな本は置いていないので、存在しないものとして扱われているというか。

島田 上の子は？